

こころ日記

「ぼちぼち」

(9) 同じ親なのに…

脇野 千恵

同じ親なのに…

中学校の3年間はあっという間に過ぎていきます。まして教師の立場からすれば、何度も繰り返す学年配置に、教える内容も把握しているので、つつい変化のない授業をしてしまいがちなのですが、慣れというのは、本当に恐ろしいなあと思います。

とはいえ、入学してきた子どもたちの様子を見ながら、3年間を見通しての学習計画を立てていくのが常となっています。特に3年間での学習の成果によって、子どもたちの進路先が決まってきます。義務教育最後の3年間でどのように育てるのが、私たち教員の大切な仕事です。小学校の6年間でつけた力を基礎にしなから、中学校3年間で、少しずつ進路に

ついて考えさせていきます。高校入学が最終目的ではなく、この子の10年後はどうだろうか?などと想像しておかなければならないと考えています。

しかし、最近は生活に慣れるのに精いっぱい的一年生でも、早くから進路について不安を感じる生徒がいます。

「先生、私の今の成績で〇〇高校に行ける?」

「偏差値どれだけ取ればいいのか?」

という質問に、行けるとも行けないとも言えず、いつも返答に困ってしまいます。

まだ一年生なのに、もう進路を決めたがったり、あきらめてしまう子が多いにはびっくりです。生徒の半数程がスマートフォンを持っている現状の中、私たち教師よりも色々な情報を得ています。進路の情報も、親子共に翻弄されている

状況があるのではないかとと思っています。

小さい時から母親が病弱で、父親が懸命に子育てをしてきた家族がいました。長男が高学年の時、看護の甲斐なく母親は亡くなってしまいました。二男の弟はまだ小さく、母親の死が理解できていたかどうかわかりません。

長男K郎が中学校に入学し、担任を持つことになりました。ある程度の家族の情報を得ていたので、家庭訪問時には、自然と母親の不在についての話題になりました。

父親は、早くから母親は病気だったので、子どもたちもその生活に慣れていたこと、そして、母親の死についても受け入れているのではないかと聞いた話をしてくれたと記憶しています。

父親は、会社員。父子家庭を何人か見せてきていますが、実にきちんと整理整頓された暮らしに、少々驚きました。日々の学校への行事や、連絡など不備があったことは一度もありません。よくできた父親だと感心したものです。

K郎は、2年生の時も何の問題もなく、部活動や学業に励む学校生活を送っていました。3年次、また再び彼を担任することになりました。1年時より、身長も高くなり、思春期を迎えたちょっと大人な少年になっていました。どちらかというと、寡黙でシャイな性格。褒めても、嬉しいという表情をあまり出さない。本当に心の内が想像しにくい子でしたが、思春期にある子どもたちは、ほとんどがそのような感じなので、あまり気にも留めませんでした。

3年生になると、夏の部活動の引退とともに、検査によって高校合格が決まるという、人生初の厳しいハードルを越える時期がやって来ます。そのプレッシャーに押しつぶされそうになる子が、入試に近くなるとぞくぞくと出てきます。あのいつも冷静なK郎もその一人でした。

夏休み明け、2学期がスタートしたころから、彼は休み時間でも必死に受験勉強をする姿が見られました。それまでは、休み時間に好きなキャッチボールをしたりと、友だちとの時間を大切にしていました。

しかし、あまりの勉強の熱心さに顔つきもこわばり、ますます笑わない生徒になっていったので、心配して面談をすると、

「先生、僕は〇〇高校に絶対入って、K大に入ります」

と、強い口調で言いました。私は説教が嫌いなので、相手の言葉に傾聴するという事に徹しています。一度も彼に、勉強頑張らなくては、などと言った覚えはありません。むしろ、もう少し肩の力を抜いてみたら？といったアドバイスをしたくらいです。K郎の成績は、頑張りに反比例し、悲しいかなドンドン下がっていきました。しかし、最終進路先を決めるにあたって、親子ともに〇〇高校への受検を頑としてあきらめませんでした。

担任としては、できるだけ失敗をさせてはいけないと、安全パイを勧めます。これは長年の勘というものでしょうか？K郎が〇〇高校に受かる確率は、とても低いとっていました。

残念なことに、私の勤は、現実のものとなってしまうました。結果を知った彼が、大丈夫だろうかと心配をしましたが、卒業式の次の日、礼を言いに学校にやってきました。

「先生、僕頑張ります。絶対K大に入りますから！」

そういった彼の言葉が、今でも忘れられません。なぜ彼は、そこまで頑張ろうとするのか？私にどう言ってもらいたかったのか、まだまだ頑張るので見ててくださいというメッセージなのか、今でもその真意を考えることがあります。

K 郎の弟？

さて、弟が入学してきました。K 郎の弟とはつゆ知らず、大変な子が入ってきたといううわさだけが耳に入ってきました。

朝の打ち合わせで、弟の M 志の問題行動が毎日のように報告されていました。

例えば、思春期にありがちな深夜徘徊、窃盗、万引き、恐喝などなど。1 年生からその子を中心に、学年は落ち着かない状況になっていきました。学校で指導を受けると暴れる、どの教員にも暴言を放つ。こんな生徒は、山ほど接してきていますが、根底にあるものは、大人への信頼の欠如だと考えられます。小学校の先生、あるいは家庭の中での M 志との関係はどうだったのだろうか？

しかし、相変わらず学校では、手に負

えない生徒は14歳まで何とか持ちこたえ、それを越えれば一気に更生させてもらえる

所へ、というビジョンを持っていました。何度も担任をする中で、警察のお世話になる生徒もいましたが、何とか施設送りだけは回避してきたつもりです。本当にその子にとって、処罰的な対応が子どもを良くするのかと、今でも自問自答する毎日です。

M 志の父親は何度も学校に呼ばれ、今後について教師から指導を受けました。父親は、家でも暴れ出し手に負えないので、もう他機関に任せたいという意向を示しました。

最近気になるのは、家庭的に基盤があるにも関わらず、子どもの荒れに対して、施設に預かってほしいと、本気で申し出る親が目立つことです。これは育児放棄というのでしょうか？

一方で、発達障がいではないかと訴える親がいることも気になります。思春期の子どもはとても繊細で、毎日心は揺れ動き、色々な葛藤と闘っています。友だち関係に日々気を使い、一緒に懸命生きています。子どもの荒れにきちんと向き合おうとしない親と教師の何と多いことか。

実は、M 志と兄の K 郎とは良い関係ではありませんでした。母親を亡くした時は、兄よりもまだ小さい頃です。いくら父親が手を抜かず子育てをしていたとはいえ、その時期母親代わりをしてくれる人がいたか、彼を理解する人がいたのが気になります。

父親からは、賢くて努力家だった兄と常に比べられて大きくなった M 志。K 郎が K 大に行くと言ったのも、どうも父親の学歴第一の考えに影響されてのことだったようです。当時、外見からは想像できなかった本当の父親の姿が、M 志の父親であることを通して見えてきました。

M 志は、父親を憎んでいました。こんな自分にしたのは、すべて父親だと思っています。兄はうまくやった。K 大には入れなかったが、それなりの名の知れた大学に入ることができた。自分は、勉強もできないし、父親から嫌われている。進路なんてどうでもいい。と保健室で吐露したそうです。

私は M 志が卒業間近になって、初めて K 郎の弟だということを知りました。そうだったのか。

K 郎はとても頑張り屋だから、家の中では、M 志は息が詰まる毎日だったろうなあと想像できました。

同じ親であるのに、どうしてこのような違いが出てくるのでしょうか？父親は、M 志にも同じように勉強をさせ、それなりの期待もしたことでしょう。しかし、期待されることに反抗できたのは、弟の M 志だったのかもしれない。兄の K 郎は、〇〇高校から K 大に行くという父親の期待に応えようと、だからあんなに頑張っていたのだということがわかりました。

父親にとっては大変だったかもしれませんが、感情の起伏が激しい M 志の方が人間らしくていいではないかと思いました。

勉強だけがすべてではないと言いながら、高校入試を優先させ、そこから落ちこぼれた子は、親でも疎ましくなるものなのかと。

やがて、弟の M 志も卒業していきました。どうにか入学できる高校が見つかり、元気に通学していると聞きました。

将来、父親とこの兄弟はどのような関係をもって暮らしていくのでしょうか。10年後の彼らが、あの時はああだったこうだったと、思春期の頃のことを語る仲になっていてくれればと思います。

(中学校教員 脇野千恵)